

序章 近代日本と「てにはドイツ語」

I 「てにはドイツ語」とはなにか

本書では「てにはドイツ語」について論じる。

「てにはドイツ語」といっても、今となっては知る人も少ないだろう。

とはいえ、おおげさにいえば、近代日本語のあり方のみならず、学知のあり方までもうかびあがらせるのが、この「てにはドイツ語」である。以下、説明していきたい。

まず、「てには」あるいは「てにをは」は、もともとは漢文訓読のための「ヲコト点」(漢字の上下左右・四隅に付られた点)に由来するのだが、「助辞(助詞・助動詞)、活用語尾など文法的な関係を表す形態やそれらの間の特徴的な呼応を総合して指す」ものとされている¹⁾。日常的にも、「てにをはが合わない」(語法がおかしい、話のつじつまが合わない)といった意味で使われており、ことばそのものは耳慣れたものである(と思う)。

ところが、それに「ドイツ語」がついた「てにはドイツ語」となると、一気に耳慣れなくなる。これは、ドイツ語の単語を日本語の語順でならべ、それを日本語の助詞などでつなげたもの、とされている。のちにふれるが、一九三〇年代にこの名称で呼ばれることが多くなった。

では、本書のタイトルでもある「てにはドイツ語」という問題」とはなんであろうか。それはたとえば、「デラックスなレスト・ハウスでレジャーをエンジョイするホワイトカラーたち」などという「カタカナ英語の氾濫」と同じようなものなのだろうか（ちなみにこの例は一九六六年の論文に引用されていたものである〔2〕）。つまりは、「日本語の乱れ」という問題なのだろうか。とすれば、近年であれば「英語帝国主義」のあらわれとして指摘されることもある問題でもある〔3〕。

また、たとえば明治初期の東京の書生が登場する坪内雄蔵『当世書生気質』（一八八六年）では、「実には『普通学識字典』はユウスフルじや。君これから我輩にも折々引かしたまへ。比ストリイを読んだり。比ストリカル委ツセイを草するときには。これが頗る益をなすぞウ」〔4〕などと語らせ、あるいは「質」を「セブン七」と隠語的に使わせるなど〔5〕、新時代のエリートはやや軽佻浮薄な雰囲気をかもしだす際にも効果的につかわれている。

このようなことが、「てにはドイツ語」という問題」にもあてはまるのだろうか。

まず、ドイツ語は、単語レベルでいえば、『当世書生気質』のような使われ方もなされていたようである（第一章でふれる、ドイツ語を学び帝国大学医科大学を一八八九年に卒業した入沢達吉の回想では、学生同士で「汁粉のことをSuppekind」「スープ十子」〔6〕、「鮎のことをZahlwort「数字Ⅱすうじ」」〔7〕、「銭入の中が空になることをsenile「老人の意味だが発音がゼニーレ」Anophie「萎縮する」」などとつかっていたらしい〔8〕）。また、医学生ではなく、旧制高等学校生が隠語として好んで用いていたことなども想起される。

そしてこの場合、かつて旧制第一高等学校があったこともある、東京大学駒場博物館で開催された展示会「一

高／独逸——第一高等学校資料に見る日独交流史」(二〇一一年一〇月一五日～二月四日)の案内文では以下のように解説されていることにも注意したい。

〔旧制〕高等学校の生徒たちの文化にも、よく知られている通り、ドイツの色濃い影響を見ることができません。「ゲル」(Geldの略でお金)、「ゾル」(Soldatの略で兵隊)などのドイツ語に由来する隠語は、第二外国語、或いは第一外国語としてドイツ語を学ぶことの多かった高校生の中で生まれましたが、専門学校・師範学校など、第二外国語はあっても多くの時間は割けない他の系列の学校の生徒たちに対する、暗黙のうちの優越感を示しているように思われます。〔七〕

他の学校とはちがうのだ、という優越感・特権性にうらうちされたドイツ語を、隠語として用いていたことが指摘されている。この点が英語とは若干異なっているだろう。

社会言語学では「集団語」という用語で、ある特定の集団に特有のことばをとらえているが、集団語研究の第一人者・米川明彦は、『集団語の研究』で以下のような定義を下している。

「集団語」とは特定の機能的社会集団（血縁的・地縁的ではない）に特有な、あるいは特徴的な仲間内の通用語のことである。したがって、その集団の専門語・術語は除く。集団語は社会集団の種類に基づいて、反社会的集団の語（スリや泥棒の語など）・職業的集団の語（業界用語・職場語）・被拘束集団の語

(軍隊・囚人の語)・学生集団の語(学生語・キャンパス用語)・趣味娯楽集団の語(囲碁・将棋・オタクなどの語)などを指す。なお、補足的に集団に使用される特有の文字も含める。^[8]

この『集団語の研究』では、旧制高等学校の学生語も集団語としてとりあげているが、ドイツ語がもととなったものが多い(同書第六章第一節参照)。さらにまた、米川は『若者言葉を科学する』(明治書院、一九九八年)のなかでも、「大正から昭和二〇年までの男子学生の言葉」として「旧制高等学校の学生語」を分析している。なお、先の『当世書生気質』の例は、「明治前半の男子学生の言葉」として引用されている。

2 専門的・特権的な「てにはドイツ語」

一方、「てにはドイツ語」とは、たんにドイツ語の単語を日本語の語順でならべただけではなく、その単語のなかに医学専門用語が多いことが最大の特徴である。上述の旧制高等学校生(理系)のなかから、すべてではも

もちろんないが、帝国大学医学部で医学を勉強するような学生が生まれてくる。

後述するように、時系列的にいえば旧制高等学校出身の学生が「てにはドイツ語」を発明したわけではないが、旧制高等学校から帝国大学医学部に進学した場合、ある程度の連続性を感じたではあろう。

くりかえすが、帝国大学における近代日本の医学教育のなかでは、こうした「ゲル」「ゾル」などといった語彙だけではなく、ドイツ語の医学専門用語までがとりいれられた。そうしたところで生じた点が「てにはドイツ語」の特徴であり、それゆえの専門性が特権性にくわわる。

専門的すぎるため、「ゲル」や「ゾル」のように人口に膾炙することもなく「¹⁰」、¹¹「てにはドイツ語」は、「日本語の乱れ」という文脈でとらえられることもあまりなく、のちにみるように、日本医学のあり方と関連して議論されることとなった。

米川の「集団語」の定義によれば、「その集団の専門語・術語は除く」とある。たしかに普通にいつてしまえば集団外の人にわかってしまうので、金のことを「ゲル」といい、「ゲルピン」を派生させ、女性のことを「メツチェン」、そして「オツチェン」に転じておじさんを意味させたりしていた¹²わけであるから、たとえば医学専門用語のドイツ語は、この定義でいう集団語にはならない。さらに、「てにはドイツ語」は単語を日本語の語順でならべたものであるから、事象のとらえ方が異なっているともしえる。したがって米川の研究の対象にはなっていない。

「てにはドイツ語」は医学教育のなかで発生してきたので、必然的に、日本語の語順でならべられるドイツ語には専門用語が多くなるということはずでに述べたとおりである。要するに語彙の偏りが生じる。たとえ

ば「Musculus sterno-cleido-mastoideus は Hals の laterale Seite を anfvärts steigen して」などと教授は講義で話し、学生はそれをノートにとつていたらしい（引用資料によれば、「胸鎖乳頭筋は頭部の外側を上昇して」という意味になる。第二章参照）¹¹。あるいは、「Hypophysenhinterlappen カラ取ル所ノ Stoffe ノ中ニアル Vasopressin ト云フモノハ Adrenalin ニ似テ又 Kapillaren, Arterien ヲ verengen シ Blutdruck ヲ erhöhen スル」といった形で講義のノートがとられていた（意味は、「脳下垂体後葉カラ取ル所ノ物質ノ中ニアルワソプレットシン」「バソプレシン」ト云フモノハアドレナリンニ似テ又毛細管、小血管ヲ狭クシ血圧ヲ高メル」となるそうだ。第三章参照）¹²。

「デラックスなレスト・ハウスでレジジャーをエンジョイする」とはだいぶ趣が異なる。

こうした状況から、のちにふれるが、「てにはドイツ語」を排斥して日本語による「日本の医学」を確立すべきだという文脈でこの問題が位置づけられていくことにもなる。それではそもそも、医学用語は統一されているのか、わかりやすい用語で統一するにしても、医学用語はむずかしい漢語がそれこそ「氾濫」しているではないか、といった議論が続出してくる。こうした、医学に限定をもつことも、「カタカナ英語の氾濫」とは異なる特徴である。

このように、「てにはドイツ語」とは、ドイツ語で医学教育がおこなわれるという、きわめて特殊で限定的な場で発生し、流通した言語変種といえる。

いま現在、日本において医学教育はドイツ語でおこなわれていない。ドイツ語はもとより、「てにはドイツ語」で講義をうけた経験をもつ世代も、引退して長い時間がたっているであろう。したがって、「てにはドイツ語」が再生産されることはない。再生産はされないにしても、次節でみるように、一部が隠語（あるいは「集団語」と

してつかわれているものもある。

講義ノートに残された「てにはドイツ語」（講義そのものではないが、教科書も「てにはドイツ語」風に刊行されていた。第三章を参照）は、貴重な言語変種として言語学的分析の対象にできなくもないが、私の関心の中心にいまはない。

関心があるのは、この「てにはドイツ語」をめぐるてなされた学知のあり方に関する議論である。たとえば、近代的学問の受容という側面からみれば、どうしても欧米諸言語の影響をまぬかれることはできない。いわゆる「お雇い外国人」は日本語で知識を伝授したわけではなく、そこで学んだ日本人も、その影響からすぐには離脱できない。たとえば、上田万年（一八六七年～一九三七年）が帝国大学で一八九六年におこなった「国語学史」の講義ノート（新村出（一八七六年～一九六七年）筆記）をみる（図1参照）。「」は校訂者の補遺」と、それなりに英語やドイツ語が混ざっている。わざわざ原語を用いる必要のなさそうなものや、こなれた訳語がこの当時なさそうであったものなど、上田の好みにもよると思うのだが、このように板書あるいは講義されていたようである。

日本語に用語がなければつくるしかない、と考える場合もある。法学者・穂積陳重（一八五五年～一九二六年）は、英語による法学の用語を意識的にかつ苦心して日本語（漢語の形ではあるが）に直し、日本の「法学」を構想していった。そして、その行為を「法学のナシヨナライズ」と称した（第一章参照）¹³。ちなみに「国語学のナシヨナライズ」は「国学」との対峙のなかでおこなわれていったと思われるが、詳細は別に論じたい。

本題にかえると、「医学のナシヨナライズ」はそう簡単にすすまなかった。それはいったいなぜだろうか。

ひとつには、国語学あるいは法学などと異なり、ドイツ医学からの影響を長年にわたり受けつづけてきた、という点があるだろう。しかし、そもそも、ドイツ語でなければ西洋医学の導入ができなかったのか、という問題

学 [science, Wissenschaft]

science, Wissenschaft, 「学」トイフコトヲ述ベン。

先ヅ、吾人ノ智識ノ根本ノ始マルハ Ich (自我)トイフコト、Selbstbewusstsein [自覚]ヨリス。扱次ニ、初メテ自己以外ニ Object [対象]アルコトヲ見、又ハ感ズ。i. e. [即チ] 自覚以外ニ己レガ感じ得ル所ノモノヲ知ル。是レ即チ

- 1 phenomena (Erscheinung) [現象]ヲ kennen 「認知スル」コトニシテ、コノ作用ヲ Kenntniss 「認知」ト云フ。
- 2 次ニハ其ノ phenomena、又 Object ニ固有セル性質、之ナクバ其ノ物タルコトヲ失フヤウナ性質、Wesen, essence [本質]ヲ erkennen ス。之ヲ Erkenntniss 「確知」ト云フ。即チ原因結果ノ法則ノ下ニ之ヲ知ルナリ。
- 3 扱、ソノ諸種ノ Erkenntniss ヲ綜合シテ a system [一体系]ヲナシテ、初メテ Wissenschaft 「学」 (= 「識」) アリ。

故ニ、言語ヲ単ニ聞キ知リテ、之ヲ話シ、又ハ解スルコトハ kennen ナリ。何故ソノヤウニ用ウルカナドト、form ヤ rule ヲ理屈ニ知ルコトヲ erkennen スルト云フ。而シテ種々ノ parts ニテ erkennen セルモノヲ、one whole, 1 organization トナスモノ、是レ Wissenschaft ナリ。

一部分ノ Erkenntniss、又ハ、ヤタラニ種々多クノコトヲ記憶ニ輯録シテモ、尚ツ乍ラ之ヲ「学」トハ言ヒ難シ。

去レバ「言語学」トハ、means [方法、手段]ノ上ヨリ、又 circle or domain [範圍または領域]ノ上ヨリ、十分完全ニ研究スルコトヲ名[ソ]ケテ云フ[ナリ]。

「全体ヲ知リテ、而ル後部分ヲ知り、部分ヲ知リテ、而ル後全体ヲ知ル」トハ、[K. Wilhelm von] Humboldt ノ言ナリ。言語学ニ於テノ研究、亦

図1 新村出筆録・古田東朔校訂『上田万年 国語学史』教育出版、一九八四年、三頁。

がある。江戸時代を通じた蘭医学の蓄積もあり、原語をそのまま用いなくても、漢語への翻訳という形で医学知識の受容がある程度までできていたといつてよい。とはいえ、体系的な医学の受容ということとは別の話であり、臨床経験の不足による医療水準の低さは、また別の問題となるのではあるが、ドイツ医学を最先端とみなし、その導入をはかった明治政府の方針によって先端医学の受容の窓口としてのドイツ語という位置づけがなされたことも、「医学のナシヨナライズ」に時間がかかったことと無縁ではない。さらに、「ナシヨナライズ」のためには医学用語の統一が必要になるのだが、翻訳された用語のむずかしさなどもあり、そう簡単なことではなかった。こうした日本医学のあり方を象徴するのが「てにはドイツ語」であったともいえる。本書では、この現象をめぐってどのような意見が交わされていたのかを、時代背景をふまえながら、時間の幅を長くとして考えることとしたい。

3 医学とドイツ語——「上品ナ隠語」とその問題

少し話がすすみすぎた。

いまでも、医者とドイツ語は切っても切り離せないイメージがある。そもそも、医者がドイツ語でカルテを書く、ドイツ語で病名を発する、などといったイメージが生じるようになったのは、くりかえし指摘することとなるが、近代日本の医学教育、わけでもエリート養成のための東京帝国大学医学大学での教育がドイツ人によってドイツ語でなされたところまでさかのぼることができる。そして、「てにはドイツ語」もこれと無縁ではない。

医者がカルテにドイツ語で病名を書いたり、看護婦（看護師）にドイツ語の単語を伝えたりすることは、患者に病名や症状がわからないようにするためだとされていた。患者のままで患者がわからない（と思っている）ドイツ語をつかうことを、「上品ナ隠語」¹⁴と呼んだ医学者もいた。旧制高等学校でつかわれた「集団語」としてのドイツ語単語とはまた異なる位置づけがなされるわけである。

一九五三年に公開された映画『ひろしま』（関川秀雄監督、日教組プロ製作）には、原爆症の女性を診察する日本人医師（おそらく大学教授だろう）が、女性には日本語で問診し、所見を助手にドイツ語で伝えるシーンがあった。助

手はそれを筆記する。女性は意味がわからなくても表情ひとつ変えない。自分の体のことなのに。こうしたことが当然とみなされていた、ということだろう。「上品な隠語」とはいいて妙である。

一方で医者になる側も、「授を受けることを希望しておったカルテにドイツ語をかける」、つまりはカルテをドイツ語で書けることが、よりよい医者だ、というイメージを抱いていたようだ。こう述べたのは、「満洲国」国立佳木斯^{ジャムス}医科大学第三期生（一九四二年入学）の学生であった。「満洲国」の北部国境地帯のジャムスに一九四〇年に設立されたこの医科大学で医学のドイツ語を学べたのは京都帝国大学出身の教授のおかげであるとしている〔15〕。

患者の面前で患者にわからないことばをつかって話す、ということはいまだあれば許されないだろう。患者の知る権利は尊重されなければならず、医者は患者への説明責任があるのだから。そもそも、患者がドイツ語を知らないという前提だって、危ういものである。

それでもなお、医者と患者間のコミュニケーション不足が、あるいは患者側の医師不信が皆無になるわけではなく、個別の事案では多くの問題が生じていることは、身近な話を聞いても、認めないわけにはいかない。

先の米川明彦『集団語の研究 上巻』の「第四章 職業集団の語」の「第一節 医療業界用語」には、ドイツ語起源の医療業界用語が典拠となる文献とともに採録されている。典拠となる文献も豊富に示されているが、「てにはドイツ語」はとりあげられていない。しかし、医学生たちが講義でききノートにとった、日本語の語順でならぶドイツ医学の専門用語のすべてが隠語としての医療業界用語にはならなかったとしても、「てにはドイツ語」を構成するなかの単語の一部分は、隠語に転化していった。

4 現在の医療従事者がつかうドイツ語起源の隠語

米川の著書でもとりあげられている米山公啓『聞きのがせない 医者語・ナース語』（アドア出版、一九九三年、徳間文庫、一九九八年）や、米山公啓『聞きのがせない 医者語・ナース語V2』（アドア出版、一九九四年、改題『医者語・ナース語 医者がああ言えは患者がこう言う』徳間文庫、一九九九年）は、医者や看護師のつかうことばが、診断病名などをふくめてそもそも専門的であるのだが、あることばは隠語的であり、また本来の意味と異なる形でつかわれ、患者との意思疎通が不完全な状況が生じかねないという問題意識から、医者であり作家でもある米山が肩のこらない「辞書エッセイ」風にまとめたものである。刊行からある程度時間がたち、様相がかわっているかもしれないが、拾い読みしてもたいへん興味ぶかい。

ただ、「医者語・ナース語」といっても、そこでとりあげられているドイツ語起源のものは少ない。時間の経過とともにさらに埋没していつているだろう。

やや専門的な考察としては、米川の『集団語の研究 上巻』でも引用されているが、『長野県看護大学紀要』（四号、二〇〇二年）に掲載された「医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察」がある。そこでは、「ド

イツ語起源の隠語が使われることが多く、会話内容の秘密保持という点に一役買っている。「……」また、その起源がドイツ語であるとの認識がなされていない語も多く存在する」と要旨で述べたうえで、明治政府が当初めざしたイギリス医学の導入がドイツ医学のそれへと転換したことを「藩閥・学閥闘争もその理由として考えられるが、純学問的には臨床に重きを置いたイギリス医学に対して、細菌学に代表されるように徹底的に原因（原理）を追い求め、科学的に病理を追求するドイツ医学の姿勢に当時の新興日本の科学者が惹かれたのであろう」とする。

そして「ドイツ語の威力は多大なもので、特に医学においてはそれが顕著であった。その名残か、戦後、アメリカ医学の影響で英語（米語）がより頻繁に使われるようになった今日の医学界でも、ドイツ語らしい響きを持つ隠語が数多く残されている」と解説している〔19〕。

要するに、二一世紀になっても、ドイツ語起源の隠語が医療者間では使われているということなのであるが、この論文でとりあげられているのは、「入院患者さんのアナムネをとります」(Anamneseから。「病歴」の意、「あの患者さん、本日エントです」(Entlassungの接頭辞から。「退院」の意、「オーベン」(oben:「上」の意だが、「指導的立場にある医師」)「ネーベン」(neben:「下」の意だが、「自分よりも下位の医師」)、さらには日本語の「中」がついて「チューベン」といったもの、「ノイエ」(Neue:「新人」の意)、「オーベー」(O.B.:「異常なし」の意)、「ステル」(steden:「死ぬ」の最初の一音節にuを加えた)、「ムンテラ」(Mund:「口」+Therapie:「治療」のそれぞれ最初の一音節・二音節を合成。「診断結果の説明」として用いられる)など、ドイツ語とは思えないような変化をした語彙である。

一般化できないが、設備や医療内容の「進んだ」病院（都心部の病院）ほど病院内の「英語化」が進み、その結果ドイツ語の隠語を使わなくなり、逆に地方の「古風」な病院ほど、その医師やナースの間では強くドイツ語隠語が残っているようである。また、地方の「古風」な病院でも、ドクターよりはナースに、ドイツ語起源の医療職者間隠語が根強く残っている印象がある。^{〔17〕}

といった、印象論とはいえ病院の規模や地域による差異といった興味ぶかい指摘がなされている。「それを使えるようになったら一人前という雰囲気がある」^{〔18〕}ともいつているものの、情報開示の問題もからみ、また経済連携協定(EPA)による外国人看護師などが増加してくれば、こうした隠語を積極的につかおうとする力ははたらかにくなるかもしれない。

この論考から二十年近くたち、ポポヴァ・エカテリーナが、医療従事者に対しておこなったアンケート・インタビューによれば、患者への「配慮」のためにこうした隠語を使用する局面がある一方で、隠語であるがゆえに同僚間でのコミュニケーション障害が起きることもあるという^{〔19〕}。ある意味ではきわめて現在の課題ともいえる。

ともあれ、本書では、こうして消えかけているドイツ語起源の隠語を直接にあつかうものではない。しかし、くりかえしになるが、こうした隠語が発生する前段階に位置づけられるのが「てにはドイツ語」であり、その起源をさかのぼっていけば、前述のように、ドイツ人によってドイツ語でエリート養成のための医学教育がなされたところにいきつく、という点に着目している。

明治政府が、当初考えていたイギリス医学ではなくドイツ医学を導入することになったのもさまざまな理由があり、それは第一章で述べるが、帝国大学の医学教育がドイツ人によりドイツ語でおこなわれ、ドイツに留学した日本人が帰国して帝国大学の教授になってからも、ドイツ語で日本人学生に教育する、ということがつづいた。くどいようだが、そうしたなかで発生してきたのが、「てにはドイツ語」であった。

帝国大学での医学エリートの教育がドイツ語によってなされたことは、ドイツ語そのものに権威をあたえてしまった。たとえば、第二章であつかうが、一九一八年に「てにはドイツ語」の問題を指摘した人物は、「てにはドイツ語」で医学教育がなされること自体が「国辱」であるとしつつ、東京帝国大学の学生が卒業して医学士になつてからも問題がある、としている。つまり、「医学士が幅を利かして居る今の医界でその医学士が盛に独逸語を使ふ、こうなると医学士以外の医師も独逸語を使はなければ何だか肩身がせまい、医学の素養までも疑はれるやうな気がして「……」ツイ独逸語を使つて見得を張ることになる」、要するに「独逸語で話すと何だかエラさうに聞こえる」という「人情の弱点が独逸語使用を手伝つて居ることは否めない」と分析している²⁰。

ドイツ語（あるいは「てにはドイツ語」）をつかつていると「何だかエラさうに聞こえる」という感覚は、現在まで残る医療従事者間の隠語の発生と定着に関わるものといえるが、そうした感覚がドイツ医学導入から徐々に浸透していった、ということのようである。

5 近代日本語と「てには」——和辻哲郎の議論から

最後に、簡単に哲学者・和辻哲郎（一八八九年～一九六〇年）の議論から考えてみたい。

和辻は、一九三五年に発表した「日本語と哲学の問題」のなかで、以下のように論じている。近代の日本人が「日本語化した漢語の新しい組合はせ」によつて、漢語としての伝統を振りはらひ、ヨーロッパの学問の伝統をそのまま受け容れ得るとき新しい日本語を作り出した²¹（傍点原文、以下同）と。ここでいう「日本語化した漢語の新しい組合はせ」とは、翻訳のために生みだされた新漢語のことを指すと考えてよい。

そうした新漢語を生みだしていったことを、和辻は「力強い言語上の革命」²²と表現した。さらに和辻は「てには」について、

この助詞なるものは他国語における『格』や前置詞よりも遙かに働きの多いものであつて、たゞに名詞、形容詞、代名詞等の他語に対する関係を示すのみならず、あらゆる種類の語および文章の中間にあつて両者を連絡させ、意味の強調、濃淡づけ、情意上の繊細な区別、方向の指示、等の役をつとめるのである

と指摘して、その役割を高く評価している。和辻の考察は、やや飛躍させれば、江戸期までの漢文訓読体が、明治期になって欧米語の翻訳文体などの影響^{〔24〕}のもと、あらたなよそおいで近代的文体に変容した^{〔25〕}ことを「言語上の革命」と表現したものといってもよい。

「てにはドイツ語」については、こうした「言語上の革命」によって得られた近代的文体をヒナ型にしたものとはいえるが、そこにあてはめるべき適当な用語が熟しきらないうちに、ドイツ語があてはめられて発生したと考えることもできる。

しかし、たんにドイツ語の専門用語（ばかりではないが）をそのままとりこんだのであれば、和辻のいう「力強い言語上の革命」を十分には経ていないといえるのではないか。もちろん蘭医学以来の漢語の訳語は存在したが、帝国大学の内部で特権的に使用されるドイツ語によって、あたらしい漢語による「革命」の遂行は不完全な状態にとどめおかれた、といってよいかもされない。先にふれた穂積陳重がいう「法学のナシヨナライズ」は、それなりに「革命」が遂行されたといつてよいが、医学の場合は、その「ナシヨナライズ」をめざす動きはあったものの、そう簡単に進まず、「てにはドイツ語」が発生した、といえるのかもしれない。

「てにはドイツ語」の発生は、ことばをつよくしていえば、明治政府が選択したドイツ医学への隷属を象徴しているともいえるだろう。したがって、第二章でふれるが「てにはドイツ語」を排斥しようとする議論は、帝国大学における医学教育の問題ともからんで、いきおい過激なものになってくるのである。

先の「カタカナ英語の氾濫」の背景に、英語帝国主義批判者が指摘するような、一般の人びとのアメリカ的なものへの憧れがある、とする見解をとりあえず認めれば、そうした、漠とした「憧れ」とはまったく異なった隷属という環境に「てにはドイツ語」はある、といえる。そしてその隷属は、権威とも結びついていた。私は、「憧れ」は隷属のうらがえしでもあると考えるので英語帝国主義の受容と同様の心性があったと考えている。

6 本書の内容

ということ、学知の翻訳の問題としても、日本語のあらたな表現の可能性としても、深めることのできないのであるが、それでもやはり気になる存在である。

「てにはドイツ語」が問題化される背景を読みといていくことで、日本の近代医学における言語問題を検討するのが、本書の大きなテーマである。

本書では「てにはドイツ語」で統一するが、「てに(を)はドイツ(語)」、「日独混用文」、「鵠的ドイツ語」、「電

用ドイツ文」なども表現されていた。のちにみるが、一九三〇年代に「てにはドイツ語」という用語（「テニハ独逸」なども）が積極的につかわれるようになる²⁶。こうした「てにはドイツ語」の存在が問題視されたためであった。

くりかえしになるが、「てにはドイツ語」に関する先行研究はほとんどない。どのように、そしてなぜ問題視されたのか、そもそも「てにはドイツ語」の発生の原因はどこにあったのか、敗戦後急速に消滅していった「てにはドイツ語」の存在からなにを教訓としてひきだすべきなのか、などを考えていくことにしたい。そうすると必然的に、やや大げさではあるのだが、先にのべた、「近代日本語のあり方のみならず、学知のあり方までもうかびあがらせる問題」にいきつくのである。

本書では、医学用語そのものの検討ではなく、それにまつわる言説を歴史的に追うことになる。内容の概略は以下のとおり。

第一章「てにはドイツ語」の発生」では、「てにはドイツ語」の発生について、その時期を、ドイツ語で教育を受けて留学し、帰国した日本人教授たちが活動をはじめの一八八〇年代後半に置いて論じる。これは帝国大学での講義で主に用いられたもので、講義ノートで記されるレベルにとどまるものとされ、公開する場合、あるいは講演などでは、「てにはドイツ語」はそれほどもちいらなかったとされている。

第二章「問題化する「てにはドイツ語」と 에스ペラント——一九一〇年代後半における医学界の言語問題」では、

「てにはドイツ語」での教育が定着しつつも、ほかの分野で「学問のナシヨナライズ」（日本語で専門講義ができること）が進んでいる環境のなか、医学においても「学問のナシヨナライズ」が求められているのではないかと考えた若い世代の「てにはドイツ語」批判を紹介する。第一次世界大戦を通じてドイツの地位の低下のなかで、前世代の医学のあり方への疑問とあいまち、「てにはドイツ語」の存在への疑義が明確に示された批判であった。「医学のナシヨナライズ」の主張は、第一次世界大戦後の日本のナシヨナリズムの高まりとも連動し、「ナシヨナリズムの医学」につながる傾向をもってはいたが、ドイツ語のかわりに国際的な交流の言語として 에스ペラントが議論の俎上にあがっていたことが、のちの時代の議論と比べて特徴的であった。これもまた、時代を反映したものとといえるだろう。ただ、ここでなされた、権威への批判という側面は、黙殺されていく。

第三章「浸透する「てにはドイツ語」」では、閉鎖的な場面でしかもちいられていなかったとされる「てにはドイツ語」が、市販の教科書ではふんだんに使用されていた事例を追う。当初はドイツ語などは関係なく漢語で記されていた教科書が、学生の要望によって、つまりは売れるから、という理由で、「てにはドイツ語」で書き直され、それがさらに需要を喚起していったことを示す。そして、一九三〇年代後半になり、日中戦争がはじまるころになると、「てにはドイツ語」で書くことに対する風当たりが少しばかりつよまり、表記のあり方も多少変化する。

第四章「再問題化する「てにはドイツ語」——一九三〇年代から一九四〇年まで」では、第二章でとりあげた一

九一〇年代末の「てにはドイツ語」への違和感が、その当時は医学界でひろく共有されなかったのに対し、一九三〇年代になると、医学界でも共有されるようになったことをとりあげる。これはドイツ医学からの独立という意識のたかまりとともに、当時の国語運動のもりあがりとも連動しており、週刊医学雑誌『日本医事新報』ではこの「てにはドイツ語」の存在を問題視しはじめる。こうした議論をもりあげた人物として元陸軍軍医監・下瀬謙太郎（一八六八年～一九四四年、内科）の存在も欠かすことができない。下瀬らが参加した国語愛護同盟医学部や国語協会での議論も追う。

第五章「医学用語統一への道と医師試験用語問題」では、「てにはドイツ語」が発生したのは日本語の医学用語が不統一であってひろくつかわれなからだ、という認識のもと、日本医学会が総力をあげて各分野での用語の統一をはかった。それは日本語による医学をめざす過程でもあった。また、日本語での医学というをつきつめていくと、医師試験の用語問題が浮上する。日本の医師試験は、医師のレベルを確保し、徐々に漢方医を排除していくために明治初期から施行されてきたが、卒業試験に合格すれば医師免許が交付される医科大学や医学専門学校が増加してくると、一九二〇年代には医師試験の受験者数は激減し、年に数名の外国人受験者がいる程度となっていた。その医師試験が日本語以外の言語で受験できたことが日本語による医学という観点から問題化された件をとりあげる。この第四章と第五章では、「てにはドイツ語」を排斥することによって「医学のナシヨナライズ」を具体化する動きをあつかうのであるが、そこには「ナシヨナリズムの医学」の要素が色濃く反映されていくことになった。

第六章「大東亜共栄圏」のなかの「てにはドイツ語」では、一九四一年以降の医学界の言語問題を追う。とりわけ一九四二年の第一回日本医学会総会にむけて、医学用語統一問題とともに学会での外国語使用についても問題となっていた。その際に参照されたのが「てにはドイツ語」であった。また一九四二年から三回にわたって開催された東亜医学会の使用言語についても考察した。これは中国大陸進出ともかかわった、日本語による日本医学のひとつのあり方を示すものでもあった。「ナシヨナリズムの医学」がみずから新たな普遍とみなして「大東亜医学」へと転化しようとしていたとみることできる。

終章「てにはドイツ語」の終焉——ドイツ語から英語へ」は、一九四五年の敗戦後に、急速に英語依存へと展開し、終息していく「てにはドイツ語」について論じる。「ナシヨナリズムの医学」が依拠していた「ナシヨナリズム」が崩れさっていったことと、密接に関連しているといっただろう。

なお、医学者の生没年・学歴・専門分野などは泉孝英編『日本近現代医学人名事典 1862 - 2011』（医学書院、二〇一二年）に依拠した。

注

- 1 「てにをは」(釘貫亨筆)、日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版、二〇一八年、六五八―六五九頁。
- 2 井上寿老「言語の論理(下の上)——文章の論理」『大分県立芸術短期大学紀要』五卷、一九六六年二月、六頁。
- 3 英語帝国主義批判については、とりあえず、津田幸男編『英語支配への異論——異文化コミュニケーションと言語問題』(第三書館、一九九三年)をあげておくが、詳しく論評はしない。
- 4 ふりがなは一部を除き略。和訳も略。坪内雄蔵『当世書生気質』晚青堂、一八八六年、一八頁。
- 5 同前、二二頁。
- 6 入沢達吉「明治十年以後の東大医学部回顧談(承前)」『中外医事新報』一一三九号、一九二八年九月、四八一頁。
<http://museum.u-tokyo.ac.jp/ichiger2.pdf> (二〇二〇年九月一七日閲覧)
- 7 米川明彦『集団語の研究 上巻』東京堂出版、二〇〇九年、八頁。
- 8 「ゲル」は、『広辞苑』(第七版、岩波書店、二〇一八年)には「第二次大戦前の学生語。ゲルトの略)かね。金銭」とある。ちなみに「ゾル」はない。また、「ゲルピン」は、「ゲルがピンチ」もしくは「ゲル貧」からきたものだろう。また、旧制高等学校生の隠語、「アルバイト」「サボる」などは「集団語」という起源が忘れられ、一般的に使用されている。
- 9 米川明彦『若者言葉を科学する』明治書院、一九九八年、二二四頁。
- 10 大沢岳太郎「医学と語学」『日本医事週報』一一八六号、一九二八年一月一日、四面。
- 11 加茂正一『外来語について』国語協会、一九三九年、口絵。
- 12 穂積陳重『法窓夜話』有斐閣、一九一六年、一六六頁。
- 13 茂木蔵之助『茂木外科総論』南山堂書店、一九二六年、「緒言」。
- 14 鈴木正人「私の恩師と学生諸兄」、満洲国立佳木斯医科大学記念文集編集委員会編『万里雲濤——国立佳木斯医科大学記念文集』満洲国立佳木斯医科大学同窓会、一九八〇年、二一九頁。

- 16 江藤裕之・岸利江子・岩崎朗子・坂本ちより・頭川典子・青木三恵子・久保田智恵・杉浦絹子・八尋道子「医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察」『長野県看護大学紀要』四号、二〇〇二年、三一—三二頁。
- 17 同前、三七頁。
- 18 同前、三七頁。
- 19 ポポヴァ・エカテリーナ「医療現場における業界用語の使用状況——外国人看護師候補者の学習支援に向けて」『ことばと社会——多言語社会研究』二二号、二〇二〇年一〇月。
- 20 村田正太「業界用語問題（下）」『刀圭新報』九巻八号、一九一八年四月、二三八頁。
- 21 和辻哲郎「日本語と哲学の問題」『続日本精神研究』岩波書店、一九三五年、三九四頁（この「日本語と哲学の問題」は、一九二九年に執筆され、一九三五年に加筆されている。また、『続日本精神研究』は、『和辻哲郎全集 第四巻』（岩波書店、一九六二年）におさめられている）。
- 22 同前、三九四頁。
- 23 同前、四〇〇頁。
- 24 この点について、八木下孝雄『近代日本語の形成と欧文直訳的表現』（勉誠出版、二〇一八年）などを参照。
- 25 この点に関しての詳細は、たとえば、亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編『日本語の歴史6 新しい国語への歩み』（平凡社、一九六五年、平凡社ライブラリー、二〇〇七年）、齋藤希史『漢文脈と近代日本——もう一つのことばの世界』（NHKブックス、二〇〇七年、角川ソフィア文庫、二〇一四年）などを参照。
- 26 下瀬謙太郎という人物は「私はいつもそんな混合語をテニヲハドイツ又はテニハドイツと言い慣れています」と一九三四年一〇月のある座談会で述べており（報告 医学部——部会の模様など）『国語の愛護』第六号、一九三五年九月、三三頁）、このあたりから積極的に使用されるようになったと考えられる。